派遣隊員レポート
協力の中の青春　Vol.22

水谷真由美（みずたに　まゆみ）
平成 18 年度 2 次隊　保健師　ウガンダ

①プロフィール

1992 年、ソロモン諸島で青年海外協力隊保健師として活動していた滋賀県出身の知人を訪ね、影響を受ける。2001 年にジンバブエ、2002 年にウガンダを訪問し、アフリカへの興味を抱く。2004 年聖路加看護大学卒業。その後、滋賀医大病院脳神経外科病棟にて看護師として 2 年半勤務。2007 年 1 月から 2009 年 1 月までウガンダにて青年海外協力隊保健師として活動を行った。

②ウガンダの紹介

ウガンダは東アフリカの赤道直下に位置し、国土は日本の本州程度、人口は日本の約 4 分の 1 の国です。気候は、日差しは強いですが、標高約 1200m に位置し、湿気が少ないため、日陰に入れば涼しいです。民族は、ガンダ族、ニャンコレ族、ソガ族などがいます。公用語は英語で、教育を受けた人は話すことができます。宗教は、キリスト教徒が多いです。

③活動や生活について

私の配属先であるトロロ病院は、ウガンダ東部、ケニア国境に位置するトロロ県で最大の公立病院で、2 次医療を担っています。外来棟、入院病棟、手術棟があり、病床数は計 214 床です。職員数は医師 4 名、看護師 94 名（そのうち正看護師 19 名）を含む計 114 名で、充足率は 62%（全国平均 38%）です。主要疾患は、マラリア（私も 1 度熱帯熱マラリアに罹患しました）、呼吸器感染症、下痢症、寄生虫症、HIV/AIDS と結核、栄養失調、外傷、妊娠出産関連です。

主に取り組んだ活動は、院外での地域保健活動と院内での病院環境改善です。

地域保健活動では、地域の人々の健康保持増進を目的に、村落や小中学校を巡回し、予防接種、ビタミン A・駆虫薬の投与、衛生・栄養・HIV/AIDS に関する健康教育などを行いました。

病院環境改善では、当院が JICA（国際協力機構）の「きれいな病院」事業のパイロット病院であったため、医療の質向上を最終目標とし、その第 1 歩として 5S（整理・整頓・清掃・清潔・躾。英語で Sort, Set, Shine, Standardize, Sustain）を用いて病院環境改善に取り組みました。その結果、院内の整理整頓状況や感染対策が改善しました。

活動上の困難は、ウガンダ人のモティモティ（現地語でゆっくりゆっくりの意）なペースです。彼らが約束の時間を守らないことは日常茶飯事であり、私は、日本の病院で１分１秒を争って仕事していた頃を思い出すと、その時間感覚の違いに苛立ちを覚えていました。ただ、仕事や時間に追われ、精神的に追い詰められる日本人の報道を見る度、どちらが良いとは言えないと思うようになりました。それからは、ゆっくりでも前進できれば良いと考えて、人々と共に働いていました。

辛かったことは、患者さんの死に遭遇するときです。患者さんに出会った際に、どの検査や治療を受ければ快復すると知識としては分かっていても、様々な制約（患者の経済状況やインフラストラクチャーの不整備、病院で検査･治療する医療機器や人材の不足）から検査･治療が遅延、または行えず、目の前で亡くなっていく患者さんに出会ったときは何とも言い難い気持ちになりました。

私は、保健師業務以外にも、村の小学校で週１回、子供たちに空手を教えていました。県内に家庭内暴力を受けた女性を支援するNGOが存在し、女性のエンパワメントの一環として何かできないかということで、空手教室を始めました。子供たちが空手を楽しんでくれたことが私の喜びですが、実際は私のほうが子供たちから元気をもらい、楽しんでいたのかもしれません。

私の好きな本で、「Mutant Message Down Under」という本があります。アメリカの方が書いた本で、旅先のオーストラリアで先住民に会い、様々な価値観を知ったという話です。この本から、そしてウガンダでの経験から学んだことは、「同じ物事を見ても視点が変われば考え方が変わる」ということです。

今後、私はウガンダを 2 度と訪問しないかもしれないし、それとも再び訪問する機会があるかもしれませんが、12000km 離れた国に住む友人たちを想い、ウガンダで得たかけがえのない経験をいつまでも忘れずにいたいと思っています。